

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 21 日現在

機関番号：23804

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2010～2015

課題番号：21530569

研究課題名(和文) 日本社会におけるブラジル人の子どもの挑戦と展望

研究課題名(英文) Challenges and Future Prospects of Brazilian Children in Japan

研究代表者

イシカワ エウニセアケミ (Ishikawa, Eunice Akemi)

静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授

研究者番号：60331170

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：在日ブラジル人の子どもの多くは日本生まれか幼児期に親に連れられて渡日している。多くの親は短期滞在の目的で来日しており、不安定な労働条件や本国への帰国意識を持っていることが、子どもたちの学業達成にマイナス影響を与えることが多く見られる。しかし、そのなか、日本語を習得し、日本の文化に馴染んでいる子どもや若者が増加傾向にあり、日本の大学に進学しているケースが増えていることに注目すべきである。なお、アイデンティティの面では、本国であるはずのブラジルには行ったことがない、または覚えていないことから、国籍に関係なく「日本人」意識が芽生え、ブラジルより日本に帰属意識を感じる二世が増えている。

研究成果の概要(英文)：Brazilian children came to Japan with their parents, most of whom are employed as temporary foreign laborers. Most of the parents' main purpose is to return to Brazil after earning a sufficient sum of money. This factor negatively influences their children's education. However, it is important to consider several cases in which young Brazilians came to Japan at a young age or were born here, learned the Japanese language and culture, then were academically successful enough to enter Japanese universities.

The adaptation of the Japanese-Brazilian children to Japan isn't easy. At home they usually maintain their Brazilian customs and speak primarily Portuguese. However, the children have no links with Brazilian society (especially those who were born in Japan), so they tend to choose Japan as their homeland, and many of them consider themselves the same as any other Japanese child, in customs, language and ways of thinking.

研究分野：移民研究

 キーワード：日系ブラジル人 在日ブラジル人 外国人子どもの教育 在日ブラジル人の大学進学 エスニックアイ
 デンティティ 母語習得

1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、日本におけるブラジル国籍者は17万人を超えており、その6割程度が既に日本の永住資格を取得しており、今後日本に永住する傾向がうかがえる。ブラジル人が数多く来日し始めた背景には、1990年に日本の入管法が改正され、日本人の配偶者及び海外で生まれた子ども・孫は親族関係の入国許可を受けることが可能になったことがあげられる。

(2) 当初は、ブラジル人自身は短期滞在の予定で来日していたが、現在は長期滞在者及び永住者が増加している現状である。

(3) そのなか、日本で暮らすブラジル人の子どもは、教育をはじめ生活基盤は日本の社会で築くようになったことから、本研究ではこの子どもたちがどのように日本社会に適応して行き、外国籍でありながら日本の教育を受け、日本の労働市場に参入しているかを明らかにすることを目的としている。

2. 研究の目的

(1) 本研究では、日本におけるブラジル人コミュニティで育つ子どもたちに焦点をあて、彼・彼女らが、日本社会に適応する過程を明らかにすることを目的とする。

(2) そのなか、日本への適応方向に導く日本社会と、ブラジルの文化やブラジル人としてのアイデンティティの保持へと導く家族との狭間で育つ在日ブラジル人二世代の適応過程を考察・分析する。当事者である日本で暮らすブラジル人の内面的変化と同時に、受け入れる側としての日本社会との関係について考察する。日系ブラジル人の多くは、元々は日本移民の子孫である

とはいえ、日本では外国人である。そこで、外国籍(ブラジル人)の親から生まれた背景を持つ子どもたちがどのように日本人・日本社会から受け入れられるかに注目する。

(3) 日本社会で育つブラジル人二世代の子どもたちの日本における学業達成とアイデンティティの形成課程に注目し、考察する。

3. 研究の方法

(1) 在日ブラジル人の日常生活、職種、労働条件、教育などの現状を把握するため、文献及びフィールド調査を実施し、研究を進めた。

(2) 本研究の進め方として、研究対象者の言語(ポルトガル語、日本語)でのインタビュー調査を主な研究方法として取り入れた。本研究は、移民とその家族の移住先での社会適応、母文化・母語の継承、またエスニック・アイデンティティの保持に焦点を当て、研究対象者の内面的な側面を重視しているため、調査者が研究対象者の一番良く話せる言葉にあわせ直接インタビューを行い、対象者の気持ちを直接受け止め、分析・考察を進めた。

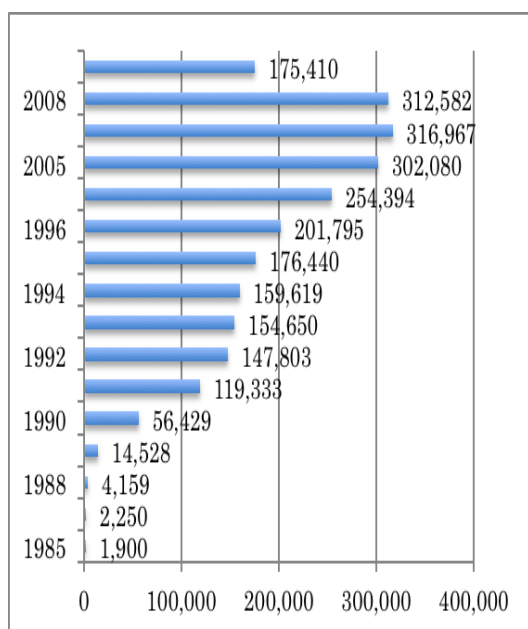
4. 研究成果

(1) 日本の出入国管理及び難民認定法の一部が1990年に改正され、日本人の配偶者及び日本国籍を所有しない子ども・孫は、親族関係の入国許可を受けることが可能となった。改正後、当時日本が直面していた非熟練労働者不足を補うため、多くの日系ブラジル人(日本移民の子孫)が来日した。その結果、1980年代までは在日ブラジル人人口は2,3千人に過ぎなかったが、1990年を境に急増し、2008年には312,582人にまで達した(総

務省統計局、2009年)。しかし、2008年のリーマンショックによる経済危機の影響を受け、在日ブラジル人人口は60%にまで減少したにもかかわらず(図1参照)、日本生まれ、日本育ちのブラジル人二世世代の子どもが増加していることに注目すべきである。

2014年現在、在日ブラジル人人口は175,410人であり、そのうち0歳～14歳の子どもが30,838人(17.6%)である(総務省統計局、2015)。

図1. 在日ブラジル国籍者 1985年～2014年



入管協会・総務省統計局のデータを参考に作成。

(2)本研究で、在日ブラジル人二世世代の現状について、まずはその子どもの母語と教育に焦点を当てた。そもそも、母語とはなにか。「母語はもともと母親が使う言語である」と一般的に定義されていることが多い。いわゆる「母語」とは生まれ育った環境で習得した言語であると一般的に認識されている。それに付け加え、その環境で意識的努力なしに習得するのが母語であると言える。

しかし、移民家庭で育つ子どもたちの

「母語」について考えると複雑になる。家庭の中と外で使われている言語が同じ場合、その解釈は簡単であるが、移民家庭で生まれる子どもの第一言語は必ずしも親の母語であるとは言えなくなる。どちらかといえば、在住する国の公用語が子どもの母語になりつつあると言える。例えば、ブラジルで生まれ育った日本移民の二世世代以降の母語はポルトガル語になっており、日本語は外国語となっているケースが多い。

移民の子どもたちの日常生活では、ほとんどの場合は現地の学校へ行き、現地の言葉を学び、現地の友達と遊ぶようになる。現地社会に浸透していくなかで、現地語がその子どもの第一言語になる可能性が高い。そしていずれは母語として確立される傾向が強いと言える。在日ブラジル人の子どもも、ポルトガル語より日本語の方が流暢であり、特に学習言語に関しては明らかに日本語の方が得意であるケースが多見られるようになっている。

(2)アイデンティティの形成過程について、在日ブラジル人の子どもたちの中、来日時に母語が確立しているかどうか、学習思考言語としての日本語習得に成功したか否か、その後の進学状況といった要素が、安定したアイデンティティの獲得と相関している様子が見えてきた。もっとも、在日ブラジル人の子どものアイデンティティ形成は家庭内及び地域内における経験の積み重ねの結果であり、異文化・多文化に対する周囲の尊重の有無といったさらに多くの要素が関係していると言える。

(3) 進学と学業達成について、多くのブラジル人の子どもは中学校卒業後、高校へ進学しても卒業までいたるのは僅かであり、中には中学校も卒業しないまま仕事を始めるケースが少なくない。親の労働・生活の状況の不安定さにより、この子どもたちが抱える問題は家庭内から始まり、教育現場である学校、そして地域社会にまでいたるのである。

(4) 日本の教育現場については、在住外国人が多い自治体や学校では、試行錯誤でこの子どもたちの支援が実施されているが、日本語指導の専門的知識を持っている教員は少なく、現場にたまたまいる教員が日本語、学校教科および学校文化の指導全般を任されることが多く見られる。しかし、このような状況の中でも、日本で育ったブラジル人の子どもが徐々に日本の大学に進学し、日本人と同じ入学試験(センター試験、一般入試)を合格している事例が増加していることから、この子どもたちの日本語習得は大学入学試験に合格できるレベルまで達していると言える。

(5) アイデンティティに関しては、本調査で、大学に入学してから「ブラジル人であることは悪いことではないと思えた」と証言する学生が多かった。それまでは、常に差別と隣り合わせにあったことが推測される。しかし、多くの第二世代の子どもたちは日本の言語を第一言語として使用しており、日本の学校文化や日本社会に親よりは遥かに適応しており、意識の面でもブラジルより日本に帰属意識を感じる若者が増加していることがうかがえた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 3件)

2016 “A identidade étnica dos jovens

brasileiros no Japão”, *Revista de Estudos Japoneses* 36, Centro de Estudos Japoneses da Universidade de São Paulo. pp. 1-18. 査読あり。

2015 “Transnational Migration between Brazil and Japan Implication on Brazilian Children’s Education” 静岡文化芸術大学研究紀要、第15巻 2015年3月、pp. 1-8(WEB) 査読なし。

2011「日本からブラジルへ帰国した子どもたちの教育」静岡文化芸術大学研究紀要、第11巻 2011年3月、pp. 11-15. 総頁163. 査読なし。

〔学会発表〕(計 6件)

2015 “Identidade étnica dos jovens brasileiros no Japão”, 42º Encontro Nacional de Estudos Rurais e Urbanos (CERU), Universidade de São Paulo, Brasil. 26 a 28 de agosto de 2015.

2015 “Segunda geração dos brasileiros no Japão - Português ou Japonês, qual a língua materna?” International Symposium on Japanese as a Global Language. August 2015, 9th to 13th at the University of São Paulo, in São Paulo, Brazil.

2015年10月17日「在日ブラジル人の25年間の歩み -第二世代の現状と展望」『浜松で考える多文化共生のフロンティア』シンポジウム、静岡文化芸術大学。

2014 “The Education of Young Brazilians in Japan” (Session of Japanese-Brazilian from Global Sociological Perspectives) XVIII ISA World Congress of Sociology, Yokohama, July 13-19.

2013年12月14日 “Transnational Migration between Japan and Brazil - Implications on Brazilian Children’s Education in Japan” 移民政策学会、2013年度冬季大会、静岡文化芸術大学。

2010年6月 「外国人第二世代の日本社会への適応 在日ブラジル人の事例をとおして」第83回日本社会学会大会（名古屋大学、東山キャンパス）2010年11月5-6日。

〔図書〕(計 4件)

2014「大学進学を果たす日系移民二世たち」『なぜ今、移民問題か』藤原書店、PP.272-275.

2013 「在日ブラジル人の子どもの言語習得とアイデンティティ形成」『ことばと社会』15号、多言語社会研究、三元社、PP.226-232。

2013 「定住外国人として日本で暮らすこと — 浜松市におけるブラジル人の意識の変化」静岡文化芸術大学文化政策学部国際文化学科編『国際文化学への第一歩』すずさわ書店、pp.376-394。査読なし。

2012 “Conditions of Japanese-Brazilian Children and Youths in Japan and their Perspectives” in Kishimoto, Tizuko and Dermatini, Zeila (EDS.) *Education and Culture: Brazil and Japan*, Editora da Universidade de São Paulo, pp.225-239.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

イシカワ エウニセ アケミ
(Ishikawa, Eunice Akemi)
静岡文化芸術大学・文化政策学部・教授